

葬義を巡る現状と課題

—葬祭業者と寺から考える今後の展望—

加藤 瑠

筆者がこのテーマに取り組んだ理由として、幼少期から習っている柔道の恩師が寺の住職であること、友人に葬祭業者がいること、2年時のゼミで現代の葬儀と法律について学んだことなど、葬儀の現状や課題を考える環境が整っていたことからである。

本論文では、まず、時代の変化と共に葬儀がこれまでどのような変遷をしてきたのかを理解した。その上で、葬祭業者、寺、法律家の3者にインタビューを行い、どのような問題や課題が多く浮上してきているのか明らかにする。インタビュー結果を踏まえ、今後、葬儀はどのような取り組みが必要であるのかを考察していく。

先行研究から、時代の変化と共に葬儀形態、葬儀のあり方が変化してきていることが明らかになった。葬儀社が誕生したと同時に地域社会が希薄化し、葬儀全般の役割が地域住民から葬祭業者に移り変わった。その結果、葬祭業者が中心となった葬儀形態に変わった。

次に、葬祭業者と寺、遺族からの相談を多く受ける法律家（墓理法）の3者にインタビューを行った。インタビュー結果から、葬儀における重要な問題を大きく3つに分けることができた。1つ目が葬儀の形骸化、2つ目は知識不足、3つ目は葬儀形態の変化である。これらの問題点には新型コロナウイルスが大きく影響していることも明らかになった。

先行研究とインタビュー結果から、今後も葬儀は簡略化が進んで行くことが示唆された。葬祭業者、寺、遺族の3者がもう一度葬儀について考える必要がある。遺族に必要なことは、葬儀知識をより深めていくことだ。葬祭業者は葬儀費用のトラブルを減らす努力をし、寺は今以上に檀家に寄り添う必要がある。寺離れが進んでいる現状において、葬儀前後の遺族のケアに力を入れることが重要だ。人々の悩みを聞けるような開かれた寺として、檀家と触れ合いを持つことが今求められている。

本研究を通じて、葬儀を取り巻く多くの問題や課題、多くの若者が知識を深め、情報を発信していくことの重要性に気づくことができた。筆者をはじめ、若者は葬儀の今後を左右する重要な役割を担っているのだ。